一般講演

1 再発を繰り返したヒロズキンバエによるハエ症 ○及川様三郎、池田照明（金沢医大・医動物）、渡辺晴二、望月 隆、石崎 宏（金沢医大・皮膚科）、篠永 哲（東京医歯大・医・医動物） Reinfection of a case of myiasis due to *Lucilia sericata*. Oikawa, Y., Ikeda, T., Watanabe, S., Motizuki, T., Ishizaki, H. and Shinonaga, S.

下腿部の潰瘍、壊死部に偶発的に発生したと見られるハエ症で、初診日の問診によれば、2カ月前より浸出液の漏出を放置していたところウジムシが這うようになり来院した。虫体は2令の初期で1匹に肉片を与えて飼育したところ13日後に羽化した。その間の再診日に再び病巣部に虫体を認め採取したが、この虫体は3令の蛹化直前の虫体で、摂食することなくサナギになり、11日後に羽化した。得られた成虫体はヒロズキンバエと同定された。その後5回の再診では虫体は認められなかったが、その次の再診時に長さ1cm程度の虫体約10匹が認められた。しかしこの虫体の同定は行われなかった。患者は66才男性で年に数回しか風呂に入らないとのことで、服などあまり着替えた様子がなく悪臭がした。この様に患者が衛生観念に乏しい場合、ハエ症は容易に再発する可能性が高いことが示された。

3 オオサンガメ唾液腺ヘムタンパク質 RpSG-I の血管弛緩物質の特性 孫健新・油田正夫・安藤勝彦・鎮西康雄（三重大・医・医動物） Vasodilation activity of a hemoprotein, RpSG-I in the salivary glands of blood sucking insect, *Rhodnius prolixus*. Sun J., Yuda M., Ando K., Chinzei Y. (Dept. Med. Zool., School of Med. Mie Univ.)

我々はこれまでにオオサンガメ *Rhodnius prolixus* の唾液腺には少なくとも3つのヘムタンパク質があることを示し、それらをそれぞれ精製した。そのうち RpSG-I と呼ぶヘムタンパク質については cDNA のクローニングを行ない、塩基配列を解析し構造を明らかにした。RpSG-I の抗凝固活性と平滑筋弛緩活性を調べたところ、抗凝固活性を全く示さなかったが、ウサギの動脈の平滑筋を弛緩する活性があることが判った。そこで、精製した RpSG を用いて血管平滑筋弛緩活性について詳細な検討を行なった。精製した RpSG-I は 400nm に吸収ピークがあり、一酸化窒素 NO を結合していないと考えられた。一方、adenylylase の阻害剤である methylene blue によって NO による弛緩を抑える条件下でも精製した RpSG-I は濃度依存的に平滑筋弛緩活性を示した。このことは RpSG-I の平滑筋弛緩活性は NO によるものでないことを意味するので、RpSG-I の apo-protein に活性があると考えられた。しかし、RpSG-I を 100°C・10 min 加熱しても活性は失われなかった。100°C・10 min 熱処理した後、10,000 rpm 10 min 遠心分離すると、大部分の活性は上清にあった。この上清を CD-10 膜によりろ過すると、活性は完全にろ液にあった。以上のことから、RpSG-I は未知の熱に安定な低分子の血管平滑筋弛緩活性物質を結合していると結論した。

2 蚊アレルギーの1例 ○大澤徳哉、森村司、葉狩良孝、三原基之（鳥取大・医・皮膚科）平井和光（同・医動物）生田和史、村上雅尚、西達寺 剛（同・生体情報）松瀬俱子（富山医大・感染予防医学）A case of mosquito hypersensitivity Tokuya Ohsawa, Tukasa Morimura, Yoshitaka Hagari, Motoyuki Mihara, Kazumitsu Hirai, Kazuhumi Ikuta, Masanao Murakami, Takeshi Sairenji, Tomoko Matuse

17歳、男性。幼少時期より蚊に刺されると発熱、関節痛などの全身症状を伴い、刺入部を中心に著明な発赤、腫脹が認められた。刺入部の多くは潰瘍化し、癒癒治癒する。今回、両下腿を蚊に刺され潰瘍化した。近医にて治療受けるも軽快しないため当科へ紹介となった。全身所見では軽度肝、脾腫大が認められた。リンパ球増多を認めるが、異型リンパ球、単球は認められなかった。EBウイルス抗体価は異常高値を示し、PCR法にて血中のリンパ球及び蚊刺部皮膚にEBウイルスゲノムの存在を示唆する BamHI-W領域（129 bp）のバンドを認めた。一方、ELISA法およびイムノブロット法による原因蚊種の同定ではヒトスジシマカが最も疑われた。

4 *Anopheles* の抗原成分と好中球遊走因子の解析 ○大橋 真（徳島大・総合科学・生命科学）・原田 正和・村主 節雄（香川医大・医動物）・石井 明（自治医大・医動物）Analysis of antigenic components and neutrophil chemotactic factor of *Anopheles* Ohashi M., Harada M., Suguri S., Ishii A.

Anopheles は、マラリアの媒介蚊として重要であり、吸血時に起こる *Anopheles* 由来の抗原成分に対する宿主の免疫応答が、マラリア伝播に何らかの影響をあたえることが可能性として考えられるが、その実体はほとんど不明である。今回その基礎検討のために、マラリア流行地住民の *Anopheles* 抗原に対する抗体、及び抗原由来の好中球遊走因子についての解析を試みた。ウエスタンブロットにより、流行地住民の *Anopheles* に対する抗体を調べると、ほぼ全例に抗体が認められ、特に45 kDの成分に対して強い抗体産生をする例が多く、68 kDの成分に対しては抗体価は低いものの、より多く住民において抗体産生が見られた。また、*Anopheles* 抗原を G3000SW カラムを装填した HPLC で分画し、各分画の好中球遊走活性を調べると、68 kD と 45 kD の抗原性分が含まれる分画に遊走活性のピークが認められた。また唾腺抗原は中腸抗原より強い好中球遊走活性が見られた。